

大学教育の本質とは何かと問えば、あまりに大きなテーマになってしまいますが、自ら学ぶ姿勢が求められるという点は共通基盤として想定されているのではないのでしょうか。ここで暗黙の裡に前提とされているのは、そのような姿勢は努力次第で誰でも獲得することできるということでしょう。しかし発達障害のことを考えていくと、この暗黙の前提に疑問を投げかけることになります。

具体性を突き詰めていくと・・・

たとえば ASD を持つ人は多義的な情報から自分なりの意味を見つけて出すことや、予め決められた正解のない課題に取り組むことが苦手なことが多いです。すると、合理的配慮として選択肢を提示するなど具体性を高めた質問の仕方を工夫するといったことがあります。しかしここで、具体的な聞き方をすることで一定の考えの方向性を示唆することになれば、自ら学ぶ姿勢という本質と抵触することにはならないかという疑問が生じます。実際には、どこまでできるかは程度問題でしょう。とはいえ、大学教育は「機会を保障する、あとは君たちの努力次第だ」という建前とは裏腹に、ある種のハンディキャップを抱えた人を端から排除してきたのかもしれないというテーマは一考に値するでしょう。



そもそも「自ら学ぶ」とは？

一方、研究業績を積み重ねている人の中にも、ASD や ADHD ないしはその傾向を持つ人というのはいます。彼らは「自ら学ぶ」姿勢があったからこそ業績を残しているのでしょう。それでも上記のような困難は抱えているわけです。すると、「自ら学ぶ」というのは必ずしも一般に考えられているような対話的・発見的なものとは限らないのかもしれないという疑問が生じます。たとえば、最初からハッキリ見えている遠大なゴールに向かって(その人にとっては)極めて具体的なこと(凡人から見ると「創造的」思考の産物)を淡々と積み重ねている、という感覚かもしれません。すると、具体性を増すと自ら学ぶ姿勢に抵触する、というのも関わる人の感覚によりけりということにもなってきます。

さて、二つの視点から大学における学びの暗黙の前提を問い直してみました。すぐに答えは出ませんが、だからこそ大学で考えてみる価値のあるテーマと言えるでしょう。

